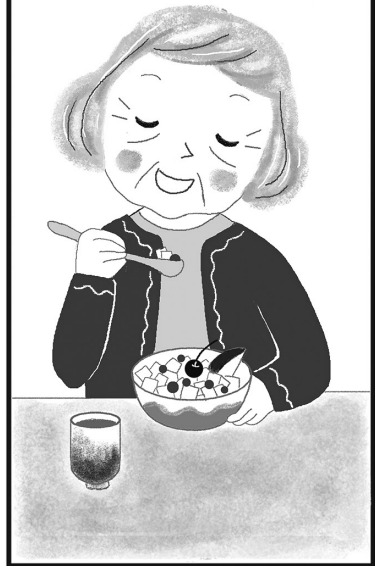




エツコさん

昼田弥子

絵 かまたいくよ



エツコさんはこのごろゆるゆるしている。現在と過去の境がゆるゆるしている。今朝も顔を洗おうと洗面所にむかうと、なぜかそこは古い納戸で、十年前に死んだ夫のミノルさんが探し物をしているところだった。

「あら、なに探してるの」

エツコさんはおどろきもせず、当たり前のように納戸にはいつていった。

「エツコさん、湯たんぼどこかな」

ミノルさんは顔を上げ、ずれた老眼鏡をもとにもどす。

「そうね。最近、冷えこんできたもの。えっとたしか……」

「お母さん、どうしたの」

ふいに声がして振り返ると、そこには一人の女性が立っていた。四十代くらいで長い髪を一つに結んでいる。エツ

コさんは見知らぬ人が家にいることにめんくらいなながらも、

「あのお……どちら様かしら」

おずおずと質問した。

女性の表情がいつしゅん固まった。けれどすぐに落ち着いた様子で、

「朝ご飯できたから、お母さんも食べよっか」

そっとエツコさんの腕を引いて歩きだした。

台所に行く、これまた、見知らぬスツ姿の男性と、見知らぬ小学生くらいの女の子がいて朝食を食べていた。

「あ、おはようございます」

男性はかじりかけのトーストを置いて小さく頭を下げる。エツコさんもつられて頭を下げると、テーブルに置かれ